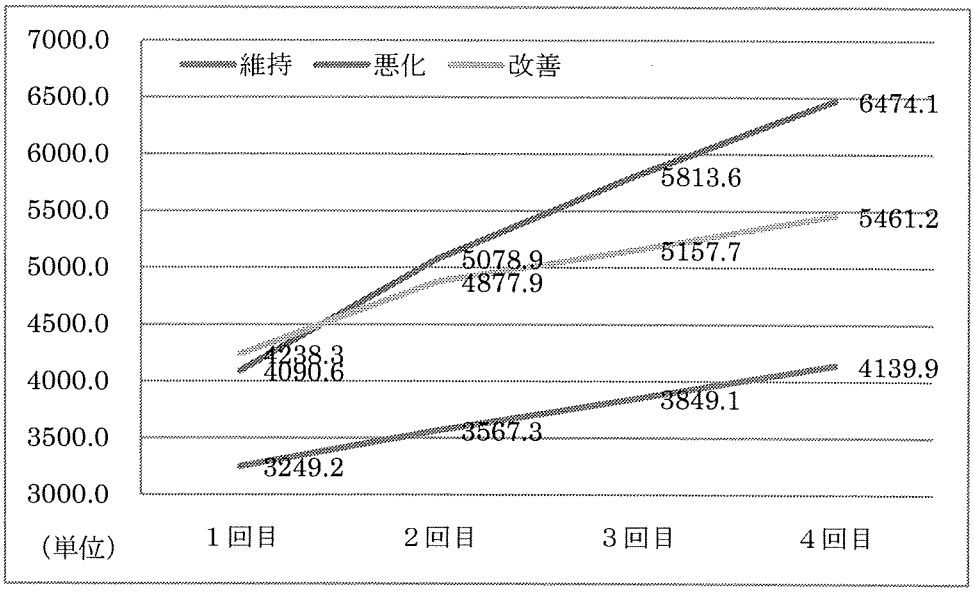


図 7-7　通所介護サービスの新分類別経年的変化

8. 通所リハ

通所リハサービスについては、群別の経年的な変化をみると、維持群の 2 回目から 3 回目を除き、維持・悪化・改善群いずれにおいても認定回数を経るごとにサービス提供料が有意に増える傾向にあった。

認定回数ごと群別のサービス量の差をみると、1 回目においては、改善群のほうが悪化群より多くサービスが提供されていたが、3 回目においては逆転し、改善群より悪化群のほうがサービス提供料が有意に多く提供されていた。

表 7-8　通所リハサービスの新分類別経年的変化

	維持(N=877)	悪化(N=6,657)	改善(N=3,000)	維持⇔悪化	維持⇔改善	悪化⇔改善
1 回目	4679.7	5233.5	5659.7	**	**	**
	**	**	**			
2回目	5291.6	6281.1	6308.0	**	**	
		**	**			
3回目	5369.0	6734.8	6451.1	**	**	**
	**	**	**			
4回目	5729.4	7265.0	6615.7	**	**	**

**P<0.01　*P<0.05

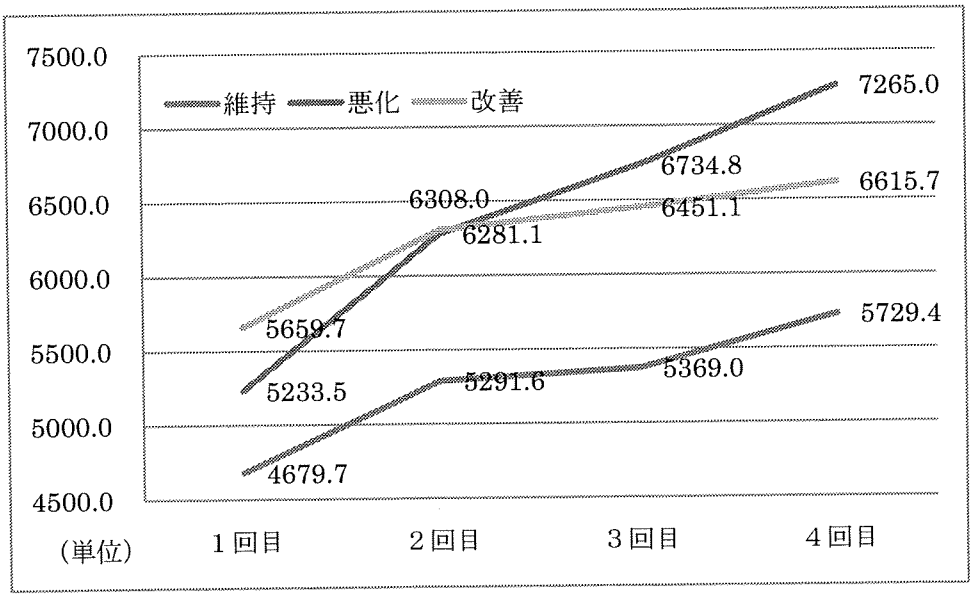


図 7-8　通所リハサービスの新分類別経年的変化

9. 用具貸与(車いす)

用具貸与(車いす) サービスについては、群別の経年的な変化をみると、改善群においては認定回数を経るごとにサービス提供料が有意に増加した。悪化群においては、1回目から2回目にかけてサービス提供料が増加したもののその後逆に減少する傾向が見られた。

維持群においては、1回目から2回目にかけてサービス量が有意に増加したものの、その後、変化に有意差は見られなかった。

表 7-9 用具貸与(車いす) サービスの新分類別経年的変化

	維持(N=270)	悪化(N=2,105)	改善(N=1,286)	維持⇔悪化	維持⇔改善	悪化⇔改善
1回目	1102.9	787.5	805.9	**	**	
	**	**	**			
2回目	1154.6	806.1	875.0	**	**	**
		**	**			
3回目	1205.4	791.6	920.4	**	**	**
		**	**			
4回目	1232.9	796.4	939.7	**	**	**

**P<0.01 *P<0.05

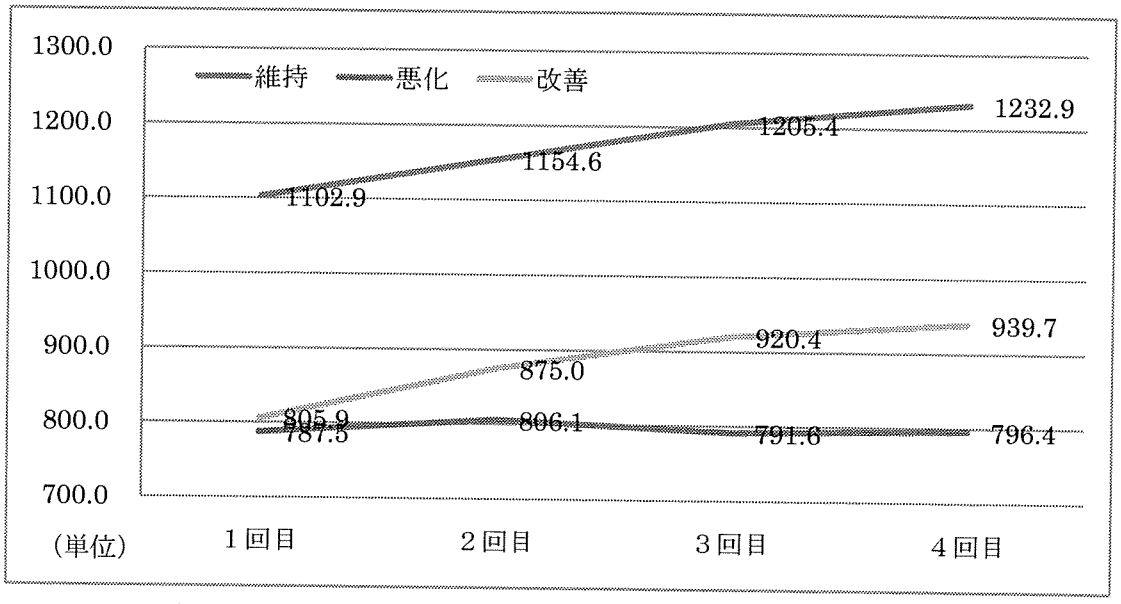


図 7-9 用具貸与(車いす) サービス料の新分類別経年的変化

10. 用具貸与(特殊寝台)

用具貸与(特殊寝台) サービスについては、群別の経年的な変化をみると、1 回目から 2 回目にかけては、いずれの群においてもサービス提供料が有意に増加していた。

維持群では 2 回目以降、変化量に有意差はなく、悪化群では 2 回目から 3 回目にかけて夕に減少していたが、3 回目から 4 回目にかけて有意に増加していた。改善群については、2 回目から 3 回目にかけてサービス料が減少していたが、その後の変化量に有意差はなかった。

表 7-10　用具貸与(特殊寝台) サービス料の新分類別経年的変化

	維持(N=490)	悪化(N=4,171)	改善(N=3,047)	維持⇔悪化	維持⇔改善	悪化⇔改善
1 回目	1385.6	1408.3	1420.6			
	**	**	**			
2回目	1406.6	1434.6	1458.2		**	
		**	**			
3回目	1401.4	1432.5	1450.2		**	*
		**				
4回目	1392.6	1448.3	1448.8	**	**	

**P<0.01　*P<0.05

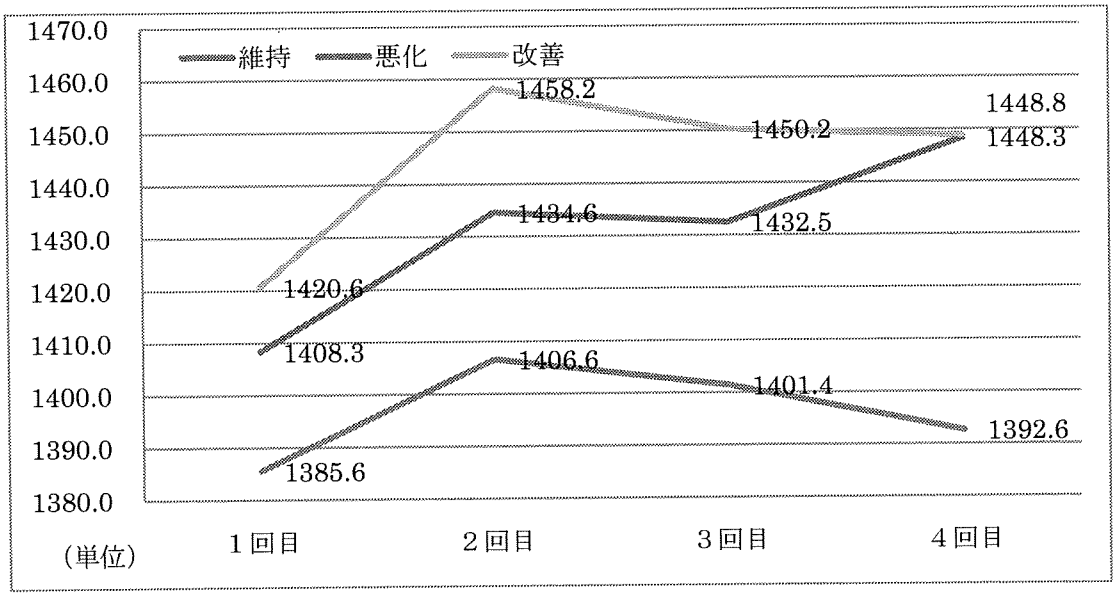


図 7-10　用具貸与(特殊寝台) サービスの新分類別経年的変化

11. 用具貸与(その他)

用具貸与(その他) サービスについては、群別の経年的な変化をみると、維持群については変化に統計的な有意差が見られなかった。悪化群については、認定回数を経るごとにサービスが有意に増加していた。改善群については、1回目から2回目にかけてサービスが有意に増加したもののその後の変化量に有意差はなかった。

一方、認定回数ごと群別のサービス料の差をみると、悪化群は 1 回目維持群・改善群と比べ一番サービス提供料が少なかったが、4回目には、改善群より悪化群のほうがサービス料が有意に高くなった。

表 7-11　用具貸与(その他) サービスの新分類別経年的変化

	維持(N=204)	悪化(N=1,648)	改善(N=1,020)	維持⇔悪化	維持⇔改善	悪化⇔改善
1回目	504.7	448.2	458.2			
		**	**			
2回目	538.6	500.2	483.7			
		**				
3回目	551.4	529.8	487.5		*	**
		**				
4回目	564.3	576.4	489.2		**	**

**P<0.01　*P<0.05

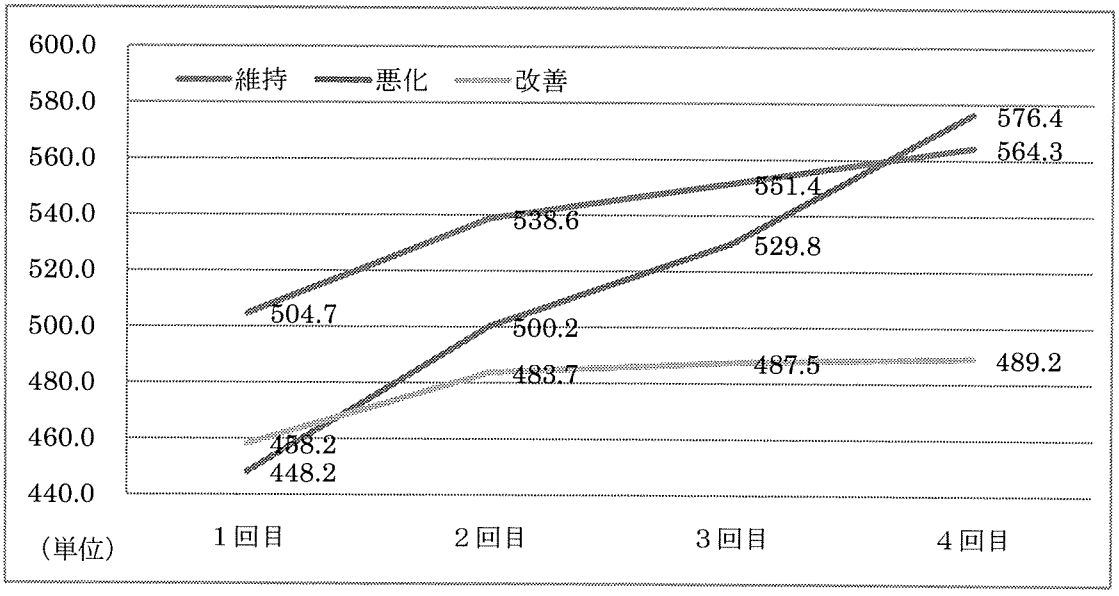


図 7-11　用具貸与(その他) サービス料の新分類別経年的変化

12. 短期生活

短期生活サービスは、維持群は、2回目から3回目にかけて有意に増加していた。この他は、その変化に統計的な有意差がなかった。悪化群は、認定回数を経るごとにサービス料が有意に増加していた。改善群は、1回目から2回目をのぞいて、サービス料が有意に増加していた。

一方、認定回数ごと群別のサービス料の差をみると、用具貸与（その他）と同様、悪化群は1回目維持群・改善群と比べ、最もサービス提供料が少なかったが、4回目には、維持・改善群より悪化群のほうがサービス料が有意に高くなった。

表 7-12　短期生活サービスの新分類別経年的変化

	維持(N=120)	悪化(N=1,824)	改善(N=586)	維持⇔悪化	維持⇔改善	悪化⇔改善
1回目	8176.3	6724.9	8198.2	**		**
		**				
2回目	7336.3	8297.5	7998.7			
	**	**	**			
3回目	9034.4	10530.3	8813.7	**		**
		**	**			
4回目	9590.0	11433.0	9427.7	**		**

**P<0.01　*P<0.05

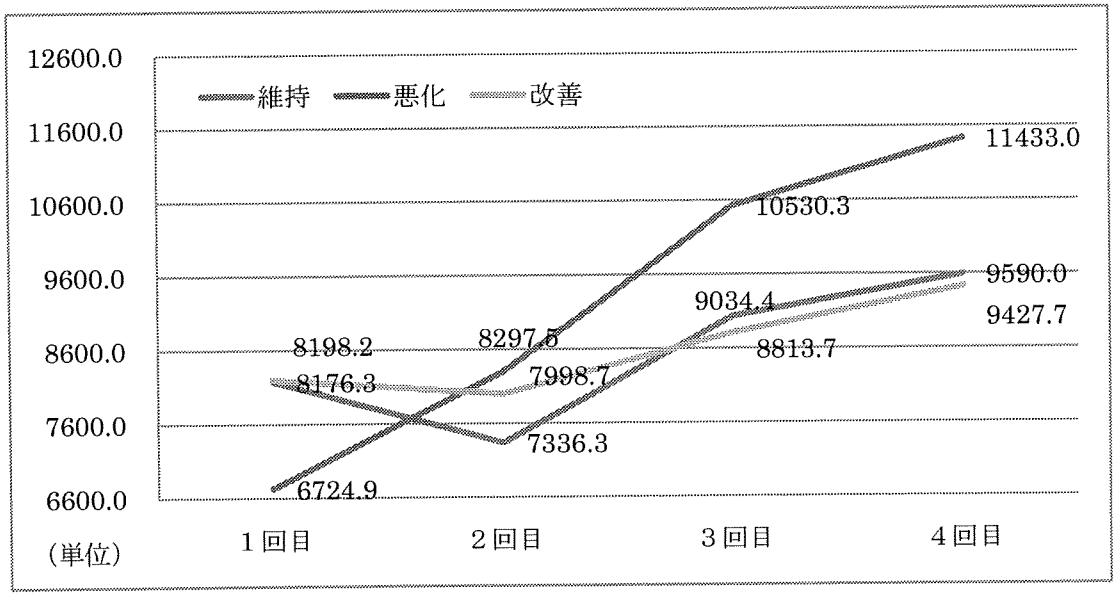


図 7-12　短期生活サービス料の新分類別経年的変化

13. 短期保健

短期保健サービスは、群別の経年的な変化をみると、悪化群のみ認定回数を経るごとにサービス料が有意に増加していたが、維持・改善群においては、サービス提供料の変化に有意差は見られなった。

認定回数ごと群別のサービス料の差をみると、いずれの認定回数においても３群間に有意差は見られなった。

表 7-13　短期保健サービスの新分類別経年的変化

	維持(N=43)	悪化(N=535)	改善(N=187)	維持⇔悪化	維持⇔改善	悪化⇔改善
１回目	7496.9	6149.0	6807.7			
		**				
2回目	6363.1	7165.2	7179.6			
		**				
3回目	8251.9	8415.3	7807.4			
		**				
4回目	7365.5	9032.4	8227.2	*		

**P<0.01　*P<0.05

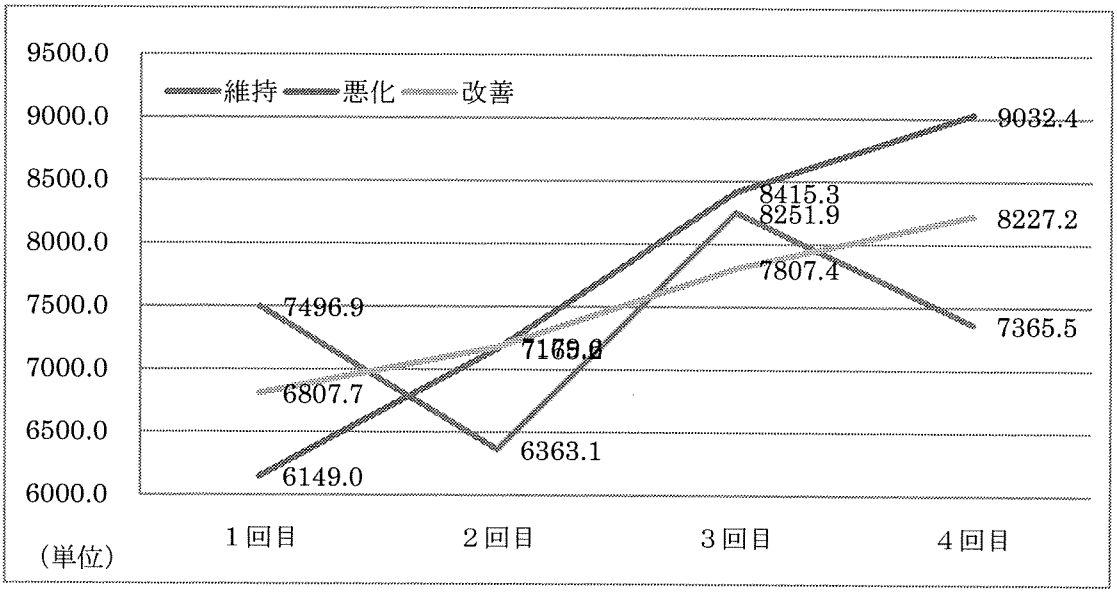


図 7-13　短期保健サービスの新分類別経年的変化

14. 短期医療

短期医療サービスは、群別の経年的な変化をみると、群別の経年的な変化をみると、維持・悪化・改善群いずれにおいても変化に有意差は見られなった。

また、認定回数ごと群別のサービス料の差をみてみても、いずれの認定回数においても３群間に有意差は見られなった。

表 7-14　短期医療サービス料の新分類別経年的変化

	維持(N=1)	悪化(N=57)	改善(N=20)	維持⇔悪化	維持⇔改善	悪化⇔改善
１回目	6770.0	6846.9	9976.4			
2回目	10436.3	8541.1	6660.0			
3回目	13477.4	9129.2	9195.4			
4回目	5438.8	10606.8	7001.9			*

**P<0.01　*P<0.05

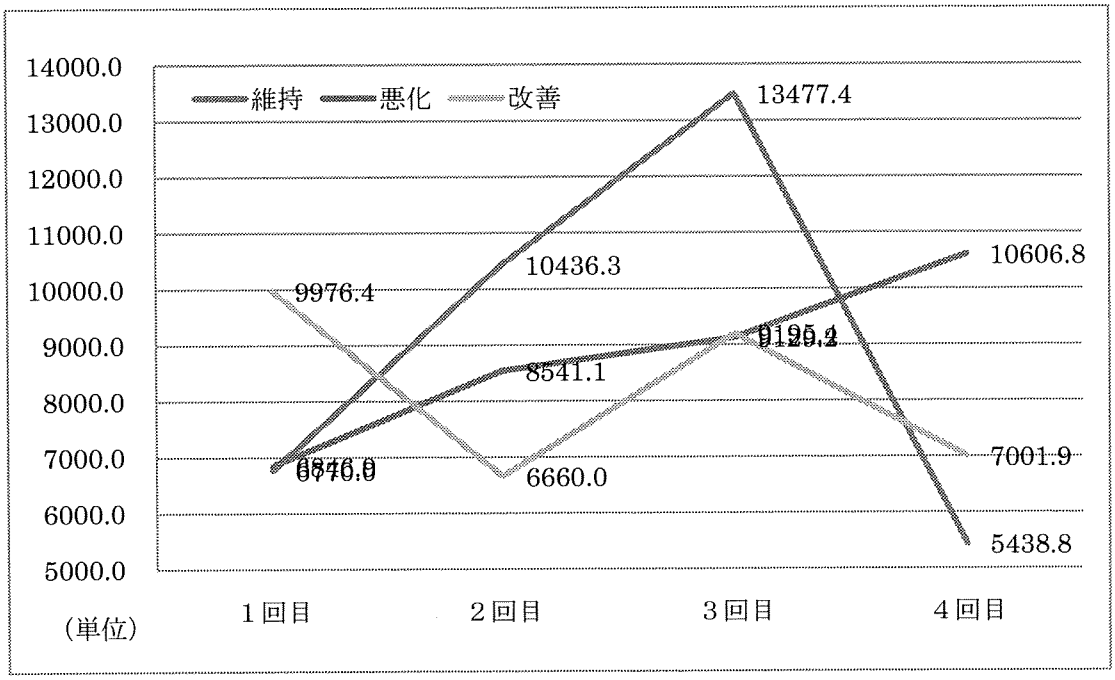


図 7-14　短期医療サービス料の新分類別経年的変化

15. 療養管理(医師・歯科医師)

療養管理(医師・歯科医師)サービスについては、群別の経年的な変化をみると、群別の経年的な変化をみると、維持・悪化・改善群いずれにおいても変化に有意差はなかった。

認定回数ごと群別のサービス量の差をみてみると、1回目と2回目のみ維持群と悪化群に有意差が示されたが、その他は、いずれの認定回数においても3群間に有意差はなかった。

表 7-15　療養管理(医師・歯科医師) の新分類別経年的変化

	維持(N=149)	悪化(N=1,325)	改善(N=612)	維持⇔悪化	維持⇔改善	悪化⇔改善
1回目	796.2	751.2	761.9	**		
2回目	784.9	757.8	752.3			
3回目	790.8	756.9	761.9	*		
4回目	789.6	766.0	765.1			

**P<0.01　*P<0.05

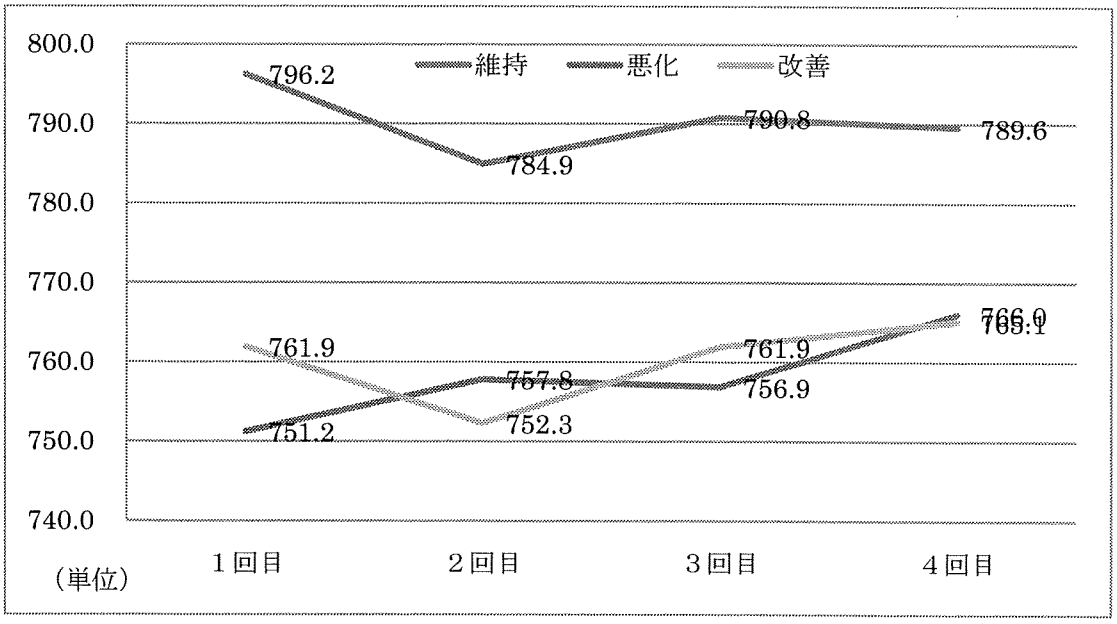


図 7-15　療養管理(医師・歯科医師) の新分類別経年的変化

16. 療養管理(その他)

療養管理(その他)サービスについては、群別の経年的な変化をみると、群別の経年的な変化をみると、維持・悪化・改善群いずれにおいても変化に有意差は見られなった。

認定回数ごと群別のサービス料の差をみると、3回目と4回目のみ維持群が減少した分、悪化群との間に有意差が示されたが、その他は、いずれの認定回数においても3群間に有意差はなかった。

表 7-16　療養管理(その他) の新分類別経年的変化

	維持(N=31)	悪化(N=238)	改善(N=121)	維持⇔悪化	維持⇔改善	悪化⇔改善
1回目	1067.4	008.4	1002.1			
2回目	1042.8	1046.3	1032.4			
3回目	992.1	1053.5	1040.7	*		
4回目	1018.5	1075.4	1059.1			

**P<0.01　*P<0.05

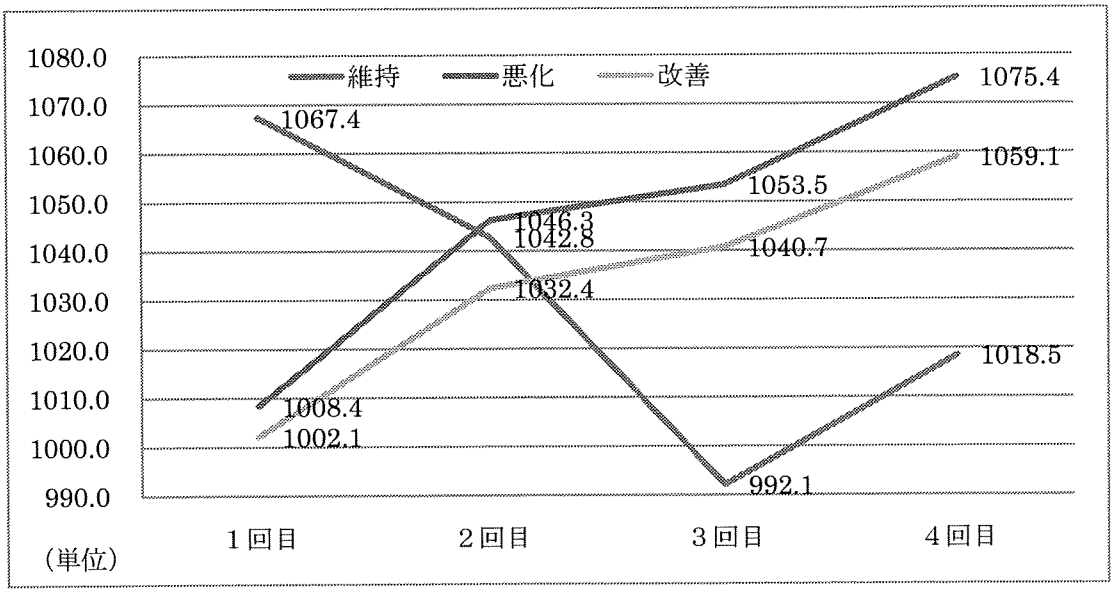


図 7-16　療養管理(その他) の新分類別経年的変化

17. 認知症対応

認知症対応サービスは、群別の経年的な変化をみると、維持群については 1 回目から 2 回目にかけては変化はなかったが、2 回目から 3 回目にかけては有意に減少した。その後 3 回目から 4 回目にかけては有意に増加していた。

悪化群は、認定回数を経るごとにサービス料が有意に増加していた。改善群については、サービスの変化については有意差は見られなかった。

一方、認定回数ごと群別のサービス量の差をみると、一方、認定回数ごと群別のサービス料の差をみると、いずれの認定回数、群間においても有意差は見られなかった。

表 7-17　認知症対応の新分類別経年的変化

	維持(N=15)	悪化(N=182)	改善(N=66)	維持⇔悪化	維持⇔改善	悪化⇔改善
1回目	24549.0	21810.9	20889.5		*	
		**				
2回目	22661.0	22418.6	23167.5			
		**	**			
3回目	21870.7	23179.7	22810.2			
		*	*			
4回目	22509.3	23559.2	23903.9			

**P<0.01　*P<0.05

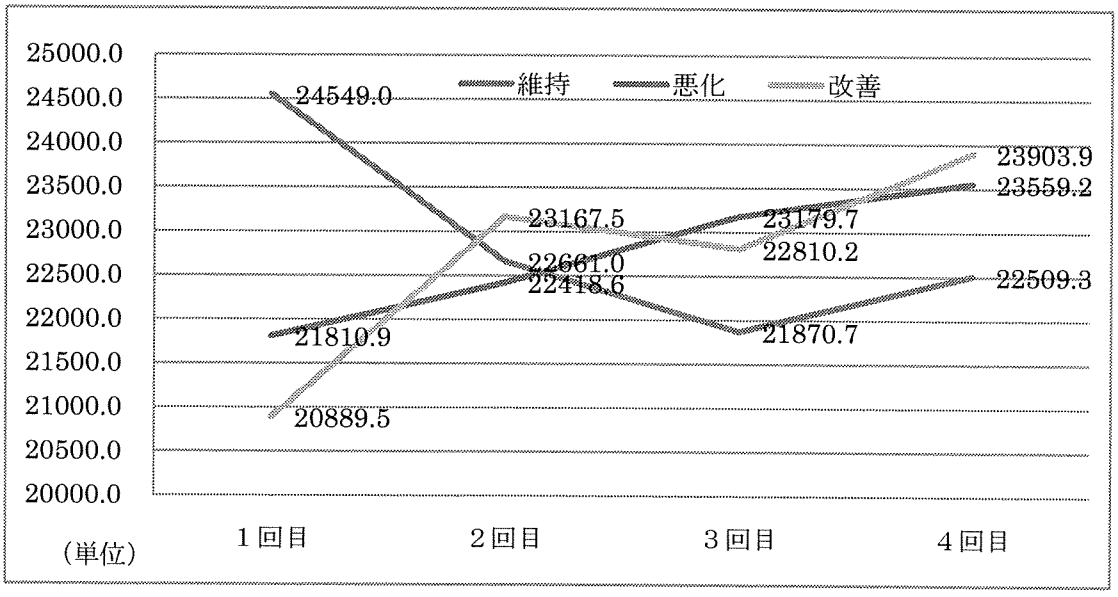


図 7-17　認知症対応の新分類別経年的変化

第8章 1分間タイムスタディ調査による分析データによる在宅・GH・施設におけるケア内容別提供時間の比較

本章では、在宅・GH・施設で実施された1分間タイムスタディ調査結果を比較し、どのような属性の調査対象者に、どのようなケアが提供され、これらのケアは、どのような場所で提供されたかを明らかにした。

1. 調査対象高齢者の属性

今回、分析した1分間タイムスタディ調査の対象となった高齢者の属性（在宅499名、GH156名、施設3519名）について、欠損値がなかった者についてのデータをケア提供場所別に比較し、分析した。

1) 年齢・性別

① 年齢

平均年齢は、GHが84.7歳で、在宅81.5歳、施設81.7歳と比較すると有意に高かった。しかし、在宅と施設の間には、年齢の有意差はなかった。

年齢階層別では、在宅および施設で多かった年齢階層集団は、90歳以上の集団であり、GHにおいて多かった年齢階層集団は、85歳以上90歳未満（28.8%）、続いて、80歳以上85歳未満（26.9%）で、90歳以上（25.0%）は3番目に多い集団であった。

しかし、80歳以上が占める割合については、GHは、80.7%と在宅の61.3%、施設の74.1%を上回っており、GHでは、80歳以上の割合が高いことが示された。

表 8-1 ケア提供場所別調査対象者の年齢の記述統計

	度数	平均値	標準偏差	最小値	最大値
在宅	485	81.5	9.8	44	100
GH	156	84.7	7.3	54	100
施設	3519	84.1	8.5	48	115

**P<0.01 *P<0.05

表 8-2　ケア提供場所別調査対象者の年齢階層の分布

	在宅		GH		施設		合計	
	N	%	N	%	N	%	N	%
65 歳未満	26	5.4	3	1.9	84	2.4	113	2.7
65 歳以上 70 歳未満	28	5.8	1	0.6	105	3.0	134	3.2
70 歳以上 75 歳未満	44	9.1	8	5.1	243	6.9	295	7.1
75 歳以上 80 歳未満	90	18.6	18	11.5	480	13.6	588	14.1
80 歳以上 85 歳未満	98	20.2	42	26.9	776	22.1	916	22.0
85 歳以上 90 歳未満	89	18.4	45	28.8	838	23.8	972	23.4
90 歳以上	110	22.7	39	25.0	993	28.2	1142	27.5
合計	485	100.0	156	100.0	3519	100.0	4160	100.0

② 性別

性別は、GH が男性 14.7%、女性 85.3%と女性の割合が高かった。続いて、施設が男性 24.8%、女性 75.2%と、在宅が男性 36.5%、女性 63.5%と示され、３群とも女性のほうが有意に多かった。入所していた高齢者の平均年齢が高かった GH で女性の割合は 3 群の中でも最も高かった。

表 8-3　ケア提供場所別調査対象者の性別の割合

	男性		女性		合計	
	N	%	N	%	N	%
在宅	180	36.5	313	63.5	493	100
GH	23	14.7	133	85.3	156	100
施設	872	24.8	2647	75.2	3519	100

**P<0.01　*P<0.05

2） 要介護度

要介護度については、GH が平均要介護度は 2.94 と最も高く、続いて、在宅が 2.69、施設では、2.55 であった。GH、在宅、施設の順で要介護が高くなっていた。

３群の要介護度別人数分布からは、在宅は、要介護２と３がともに 19.5%を占め、割合

が高かった。GH は、要介護２が 31.4%で、続いて要介護２が 27.6%と続いていた。

施設は、要介護５が 28.1%と最も割合が高く、続いて要介護４が 27.8%、在宅や GH と比較すると、要介護度が高い要介護４や５の入所者の割合が高いことが示された。

表 8-4　ケア提供場所別調査対象者の平均要介護度

	度数	平均要介護度	標準偏差
在宅	471	2.69	1.63
GH	156	2.94	1.22
施設	3509	2.55	1.24

*　**　**

**P<0.01　*P<0.05

表 8-5　ケア提供場所別調査対象者の要介護度の分布

	在宅		GH		施設		合計	
	N	%	N	%	N	%	N	%
要支援1	16	3.4	0	0.0	0	0.0	16	0.4
要支援2	23	4.9	0	0.0	0	0.0	23	0.6
要介護1	84	17.8	16	10.3	273	7.8	373	9.0
要介護2	92	19.5	49	31.4	461	13.1	602	14.6
要介護3	92	19.5	43	27.6	816	23.3	951	23.0
要介護4	83	17.6	25	16.0	974	27.8	1082	26.2
要介護5	81	17.2	23	14.7	985	28.1	1089	26.3
合計	471	100.0	156	100.0	3509	100.0	4136	100.0

3）３提供場所別中間評価項目得点

中間評価項目得点において、「麻痺・拘縮」の得点と「コミュニケーション」の得点は、在宅 27.5 点、GH30.1 点の間には、統計的な有意差はなく施設の 36.3 点が在宅および GH より有意に高く、施設入所者においては麻痺・拘縮等の得点が低い傾向が示された。

一方、「特別な介護」の得点は、施設入所者は、52.0 点、GH66.2 点や在宅 61.4 点と示され、施設入所者は、特別な介護を受けていると推定された。

「移動」の得点は、GH が一番高く 54.0 点、続いて在宅 40.9 点、施設 30.7 点と３群間すべてに統計的有意差が示され、移動の自立度は、GH、在宅、施設の順に低くなっていた。

「複雑な動作」の得点は、GH が一番高く 45.5 点、続いて在宅 31.1 点、在宅 25.3 点の

順となっており、「移動」と同様に３群間のいずれにも統計的有意差が示され、施設で最も複雑な介護が提供され、次いで在宅、GH の順となっていた。

「問題行動」の得点は、GH が最も低く 81.5 点、次いで施設 89.8 点、在宅 90.1 点であった。GH の利用者は、在宅や施設の利用者よりも問題行動が多いと推察された。在宅と施設の要介護高齢者の間には有意な差がなかった。

これらの結果から、施設の入所者においては、「移動」に問題があり、「複雑な動作」に介護が必要で、「特別な介護」という専門性を有する介護が必要な者が多い。在宅は、「麻痺・拘縮」といったインペアメントレベルの問題があり、コミュニケーションをとるのが難しく、複雑な動作にも介護が必要とされている人が多く、GH は、問題行動がある人が多く、移動能力が他の２群に比較すると高いというのが傾向として示された。

表 8-6　ケア提供場所別調査対象者の中間評価項目得点の平均値

	在宅	GH	施設	在宅⇔GH	在宅⇔施設	GH⇔施設
麻痺・拘縮得点	27.5	30.1	36.3		**	**
移動得点	40.9	54.0	30.7	**	**	**
複雑な動作得点	31.1	45.5	25.3	**	**	**
特別な介護得点	61.4	66.2	52.0		**	**
身の回りの世話得点	45.4	40.4	27.3		**	**
コミュニケーション得点	18.6	21.9	19.5	**		*
問題行動得点	90.1	81.5	89.8	**		*

****P<0.01　*P<0.05**

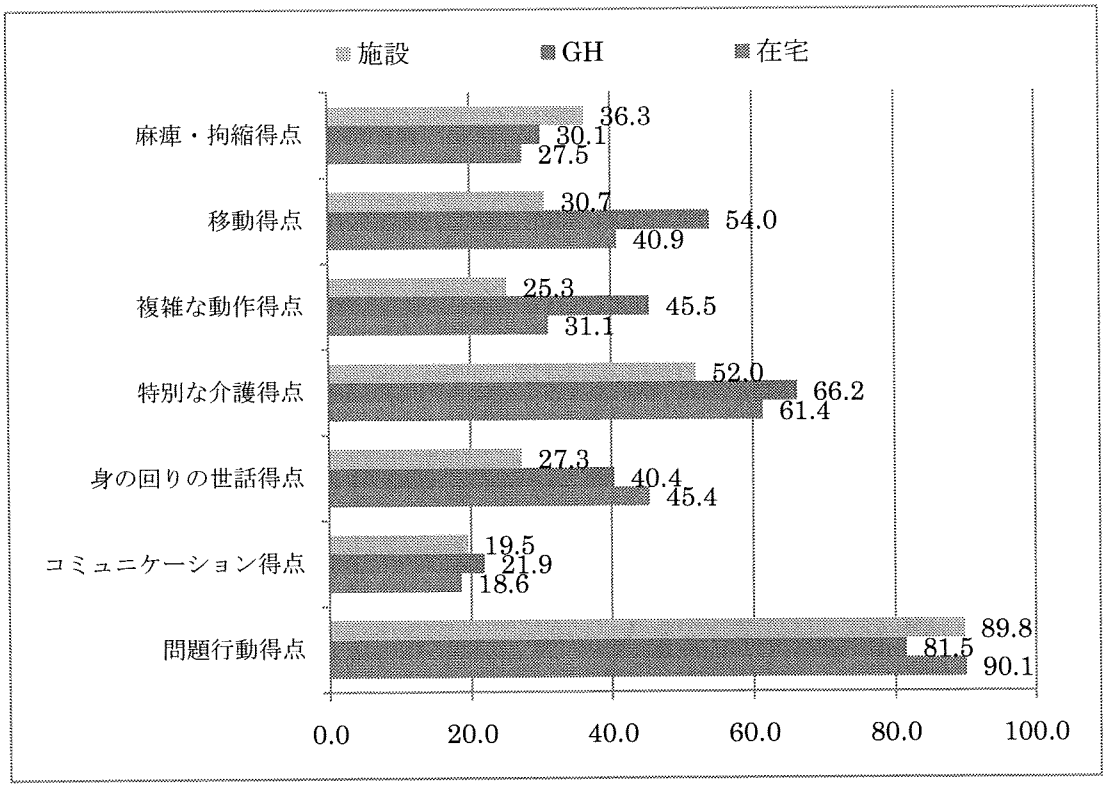


図 8-1　ケア提供場所別調査対象者の中間評価項目得点の平均値

2.　ケア提供場所（在宅・GH・施設）別提供時間

1）　ケア提供場所別平均提供時間

利用者一人あたりの平均ケア提供時間は、在宅が平均 225.0 分と一番長く、GH が 153.8 分、施設では 94.0 分であった。変動係数は、在宅 56.7、GH53.7、施設 60.3 と、大きな差は見られなかったが、最小値と最大値の差については、在宅では 764.2、施設 566.4、GH415.2 と利用者の状態によって提供されるケア時間には、大きな差があることが予測された。

表 8-7　ケア提供場所別平均ケア提供時間の分布

	度数	平均値	標準偏差	変動係数	最小値	最大値
在宅	499	225.0	127.5	56.7	6.1	770.3
GH	156	153.8	82.6	53.7	1.0	415.2
施設	3509	94.0	56.7	60.3	0.1	566.5

**　**　**

**P<0.01　*P<0.05

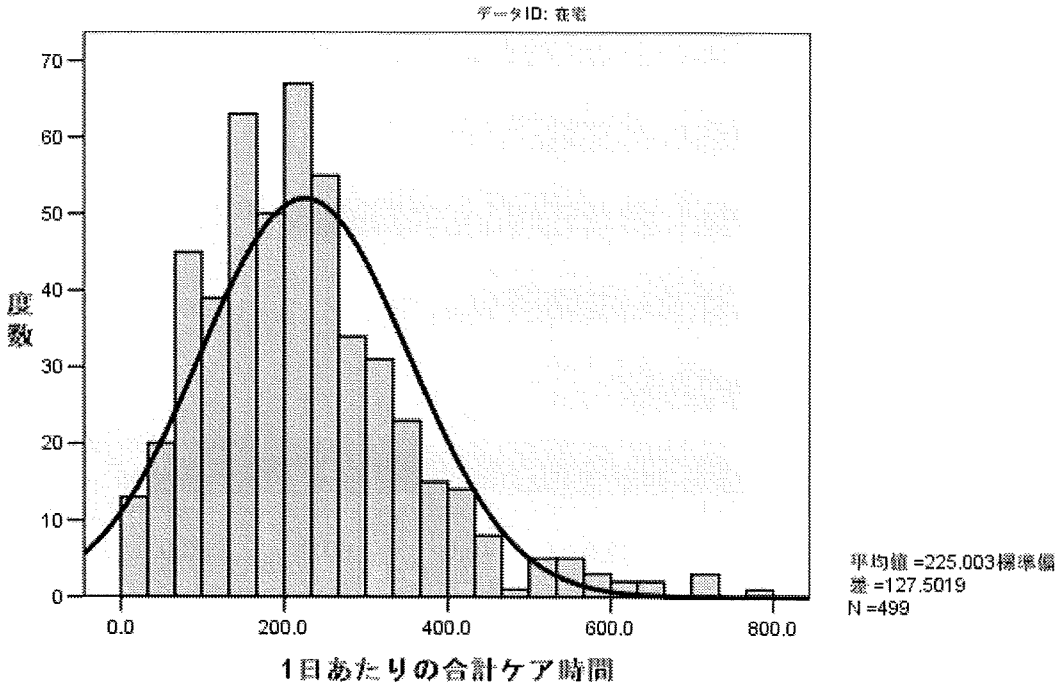


図 8-2　在宅における平均ケア提供時間の分布

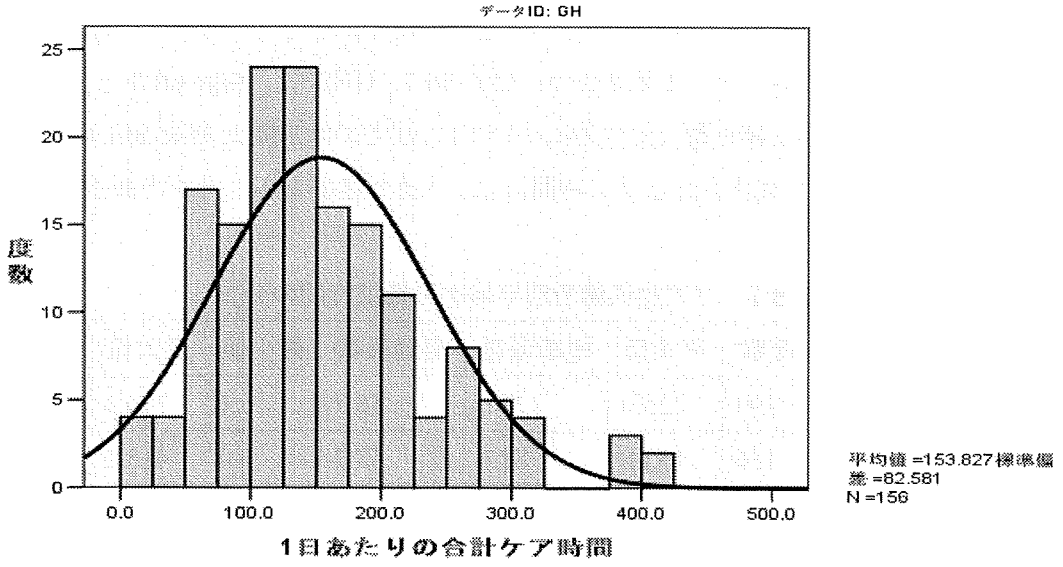


図 8-3　GH における平均ケア提供時間の分布

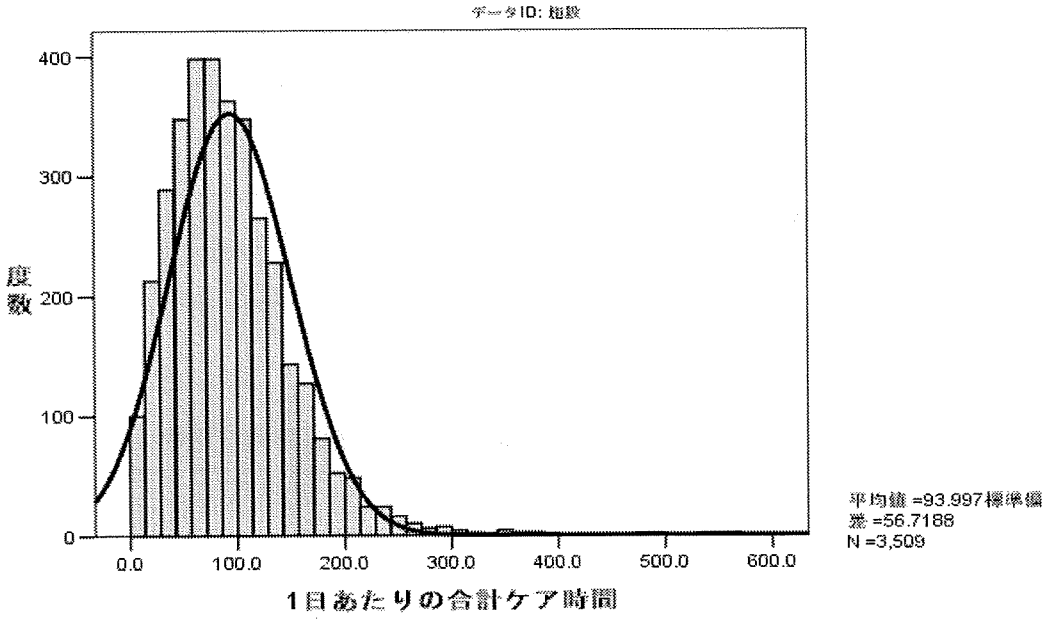


図 8-4　施設における平均ケア提供時間の分布

2）ケア提供場所別大分類別平均提供時間の比較

ケア提供場所別大分類別平均ケア提供時間は、「療養上の世話」の割合が高かったのは、施設の 71.3%であり、続いて在宅が 67.8%といずれの 7 割程度を占めていたが、GH は、56.2%で低い割合であった。

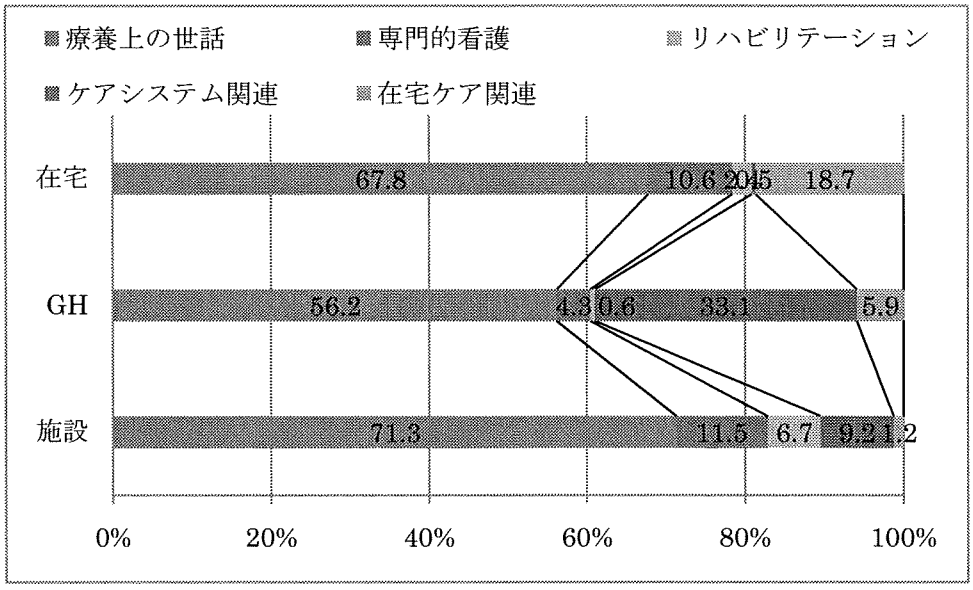
GH では、「ケアシステム関連」が全体の 33.1%を占め、高い割合であった。在宅や施設は、10%程度、発生していた専門的看護は 4.3%と低かった。リハビリテーションは、施設は 6.7%であったが、その他は、在宅 2.4%、GH0.6%と低かった。

在宅ケア関連は、在宅が 18.7%と最も割合が高く、在宅の 20%近くは、いわゆる家事に係る内容であった。このほかの、GH5.9%、施設は、1.2%と在宅のケアは、ほとんど発生していなかった。

表 8-8　ケア提供場所別における大分類別平均ケア提供時間　単位（分）

	在宅		GH		施設	
	平均値	%	平均値	%	平均値	%
療養上の世話	154.4	67.8	159.2	56.2	66.8	71.3
専門的看護	24.2	10.6	12.1	4.8	10.8	11.5
リハビリテーション	5.6	2.4	1.7	0.6	6.3	6.7
ケアシステム関連	1.1	0.5	93.8	33.1	8.6	9.2
在宅ケア関連	42.5	18.7	16.7	5.9	1.2	1.2

図 8-5　ケア提供場所別大分類別平均ケア提供時間の割合



3）ケア提供場所（在宅・GH・施設）別ケア内容別ケア提供時間・ケア発生率

(5)　ケア提供場所別ケア内容別発生率

在宅が GH や施設と比較して、顕著に発生率が高かったケア内容は、「調理」(91.0%)、「食器洗浄・食器の片づけ (82.2%)」、「更衣 (80.4%)」、「洗濯 (80.0%)」、「清掃・ごみの処理 (79.8%)」といったいわゆる家事に関連するケア内容であった。

その他には、「来訪者への対応 (49.8%)」や、「その他の行動上の問題 (69.5%)」、「その他の機能訓練 (57.9%)」であった。また、BPSD への対応やリハに係るケアも在宅において発生率が高かった。

一方、施設および GH が在宅に比べ、顕著に高い発生率を示したケアは、「摂食 (GH100.0%)、(施設 91.8%)」、「水分摂取 (GH100.0%)、(施設 91.8%)」、「敷地内の移動 (GH93.6%)、(施設 91.3%)」、「入浴 (GH95.5%)、(施設 73.3%)」、「排便及びおむつ・パット介助 (GH76.9%)、(施設 83.7%)」、「口腔・耳ケア (GH78.2%)、(施設 71.2%)」、「整容 (GH66.0%)、(施設 68.5%)」、「移乗 (GH51.9%)、(施設 76.6%)」、「薬剤の使用 (GH100.0%)、(施設 88.0%)」、「観察・測定・検査 (GH75.6%)、(施設 88.3%)」といった食事、入浴、排泄といった基本的な生活の援助に係るケアと ADL の介助、薬剤、看護に係る内容であった。

このほかに、「起立 (GH26.3%)、(施設 58.8%)」や「行事、クラブ活動 (GH36.5%)、(施設 34.2%)」、「対象者に関する間接業務 (GH100.0%)、(施設 90.3%)」、「職員に関する間接業務 (GH94.2%)、(施設 83.8%)」といったケアシステムに関する内容が高くなっていた。「その他の会話 (GH100.0%)、(施設 34.2%)」といったコミュニケージョンの割合も高かった。